

医療の届かないところに 医療を届ける



カンボジアのジャパンハート小児医療センター前で。病院では無償で小児がん治療に取り組む

特定非営利活動法人ジャパンハート理事長

吉岡 春菜 (よしかわはるな)

平成 15年 川崎医科大学卒業
同年 国立病院機構岡山医療センター入職
平成 16年 ジャパンハート国際医師長期研修に参加
平成 17年 重井医学研究所付属病院小児科入職
平成 24年 特定非営利活動法人ジャパンハート入職
平成 27年 同ジャパンハート理事長就任

特定非営利活動法人ジャパンハートは「医療の届かないところに医療を届ける」ことをミッションとし、2004年からミャンマーやカンボジアなど東南アジア諸国を拠点に医療活動をしている団体です。今では年間約800名を超える医療者がボランティアに訪れ活動を支えています。私は創設者である吉岡秀人と大学を卒業した年の冬に結婚し、「家庭と仕事の両立だ」と意気込みながら、早16年の時を過ごしてきました。

私が初めてジャパンハートの医療活動地に入ったのは、卒後2年目の年でした。ミャンマーは敬虔な仏教国で僧侶が大きな力を持つており、寺が運営する病院が各地にありました。しかし、日本の病院とは様子が違い、一日の大半は停電し、木で作られたベッドが所狭し並び、夜間は蚊帳を張り、患者さんは薬局で点滴ルー

ト・針・薬などを購入して、医療者の前に持参できれば点滴をしてもらえろという状況でした。卒後研修を一年終えたばかりの私は、病院と表現するには程遠い環境に驚きながらも、海外看護研修に参加していた看護師2名と寝食を共にしながら日々を過ごしました。印象に残っている子どもを紹介します。貧しい身形の女性が「おっぱいを飲まない」と生後半年の赤ん坊を大切に抱きながらうなだっていました。赤ん坊の顔を見ると口腔内を腫瘍が充満しており、長期間母乳を摂取できずぐったりとしている様子でした。どの病院でも「いくら払える？ 諦めなさい」と告げられ、最後の病院で「日本人がいる病院がある」と聞き、乗り物を取り継ぎ辿り着いたのです。当時、ミャンマーでは政府系の病院のみ抗がん剤の使用が認められ、私たちがのような立場の医療者には抗がん剤を手に入れることは不可能であり、どうあがいても治療を目指した治療をすることができません。無い無い尽くしの医療現場で、私たちはこのような患者にどう向き合えばよいのか日々悩んでいました。この親子に接して、主人は「手術をして一度でもいいから母乳を腹一杯飲ませよう。この子は近い将来亡くなるが、最後に母乳を飲ませた時の子ども

の体温や満足して眠る寝息は、母親がこれか

ら生きていく上で大切な記憶になる」と言い、口腔内の腫瘍をできるだけ掻き出したのでした。数日後、この母親は赤ん坊と一緒に村へ帰って来ました。私は、この母親と赤ん坊を通して、「医療の届かないところ」とは、地理的・経済的に医療に恵まれないというだけではなく、「こころ」も「医療の届かないところ」なのだと思ひました。大切な我が子を失いつつある母親のこころ、先を案じながら村を送り出した家族たちのこころと向き合える医療者になりたいと思ったのです。そして、病院を後にする患者の人生が少しでも改善することに関わるのが「医療を届けること」なのだと思ひました。どれだけ機器や医療技術が向上しても、それらと向き合うのは最後まで人間であるということ、医療は患者のためにあるということを忘れずに、これからは医療を届けるというミッションを果たしていきたいと思ひます。